

2015年度

科学する心を育てる
ソニー幼児教育支援プログラム

【綿の種】

出会いから始まる科学する心



幸田町立大草保育園

目次

I	はじめに	1
II	科学する心の捉え	1
III	科学する心を育む上で大切にしていること	1
IV	取り組みのテーマ	2
V	実践報告	2
	綿の種	2
	ピザ窯	8
	ぐりとぐらのカステラ	13
	何のたまご?	14
	紙飛行機	17
VI	まとめ	18
VII	課題と今後の方向性	18
	《前回の報告》	19



I はじめに

大草保育園では、保育目標を“見て・触れて・感じて・発見”と定めている。幸田町は幸せの田んぼと書くように、園の周りには豊かな田畑が広がり、山や川などの自然に溢れている。子どもたちは、四季折々に表情を変える自然と向き合いながら、五感で感じ、遊びを通して多くのことを学んでいる。園を取りまく環境を十二分に取り入れた、我が園ならではの保育目標であると自負している。

昨年度、移動動物園の来園時に合鴨が2個の卵を産み落とすという偶然的なことが起こり、**卵と出会う**。その**出会い**が『命を感じ、大切に思う気持ちを育む“たまごプロジェクト”』へと発展する。

振り返れば、以前から関わっている竹を含め、子どもたちが胸を躍らせる時、何かしら**出会い**があったことに気づく。それは、人であったり、素材であったり、経験であったり。そしてそれは、保育者が予め準備した保育内容ではない突発的な**出会い**であることにも気づく。子どもたちがワクワクドキドキする出会い。そこから始まる活動。活動の中で生まれる出会い。そこには、夢と感動が溢れている。

II 科学する心の捉え

私たちは、子どもたちの**科学する心**を**好奇心（＝ハテナの心）**と捉えている。好奇心それは子どもが本来持っている力。何でもかんでも対象をかまわず興味を持ち、“見て・触れて・感じる”だからわざわざ水たまりに入り、道端の花を摘み、石ころさえも宝物になり、列になった蟻を何時までも眺める。「わー。」「なんだろう?」「こうしたらどうなる?」「やってみる。」と、子どもの好奇心は特別に強い。

子どもたちにとって**好奇心**は宝である。**好奇心**の先には必ず心に感じるものがある。感動したこと、そこにたどり着くまでの過程は印象深く心に残る。自らの経験を通してつかむ確かな知識と自信、喜びが、幼児期の学びであると考えている。

このような考えから、**科学する心、好奇心（＝ハテナの心）**を大切に育むことは、子どもたちの生きていく力になると信じている。

III 科学する心を育む上で大切にしていること

●**子どもたちが出会う突発的な好奇心（＝科学する心）。「〇〇してみたい。」から始まる自発的な遊び。これが学びであり子どもたちが自ら育つ力である。この力を育むこと。**

私たちは子どもたちが、大人が決めたことをやっているのと、子どもたちが自らの好奇心で興味を持ってやっているのでは、結果が違ってくると考えている。子どもたちが**出会った好奇心（＝ハテナの心）**から始まる自発的な遊び。共感し一緒に突き進んでくれる仲間の存在。それらを大人がどんな形で応援していくのか、（何を準備し、どう声を掛け、どう関わるのか。また、見守るのか。）どんな配慮をしていくのが重要であると考えている。

方法

① **子どもたちの声に耳を傾ける。行動をよく観察する。**（子どもたちの好奇心に気づく。）

子どもたちが**好奇心（＝ハテナの心）**に**出会った瞬間**を見逃してはいけない。そのためにも、子どもたちの声に耳を傾けることや子どもたちの行動をよく見ておくことが大切になってくる。

①**出会い＝好奇心**

② **子どもたちの思いを知る。**（子どもの気持ちを感じ、知る。）

好奇心に気づいた時、子どもたちの思いを知り、その気持ちを汲み取るためにも、適切に声を掛けていく。時には子どもたちと話し合うことも大切になってくる。**②子どもの思い、考え**

③ **子どもたちの思いを確認し、スピーディーに行動に移す。**

必要な物、必要な時間の確保のために、保育士間で伝え合い、意見を交換する。そして環境を

整えて子どもたちに返す。(年齢が低ければ低いほど、早く行動に移したい！) (③確認、認める)

④ 大人の関わりと継続的な働きかけ。

小さいだけに気持ちが途切れたり、飽きたりすることもある。気持ちが持続できるように、達成感が得られるようにするための工夫や働きかけ。(④大人の関わり)

⑤ 集団ならではの力、仲間と共有。

一緒に考える。一緒に頑張る。一緒に喜ぶ。同じ時間を共有できる仲間の力を大切に見守る。(⑤仲間と共有)

IV 取り組みのテーマ

子どもたちが出会った好奇心から始まる科学する心の育ち

- 出会った事象(好奇心)に対し、すごい！不思議！やってみよう！と心の中に芽生える思いや考える力。
- 遊びを通して、気づく喜びや、学ぶ楽しさを味わう心。
- 仲間と協力したり共有したりすることで、共に生きる喜びを味わう心。

V 実践報告

綿の種 (平成 26 年 12 月～現在) 年長児・年中児
風船との出会いから始まる科学する心

★風船との出会いが次々に新たな出会いを生む。その出会いが大きな好奇心となり学びを深めた事例


① 割れた風船と出会う

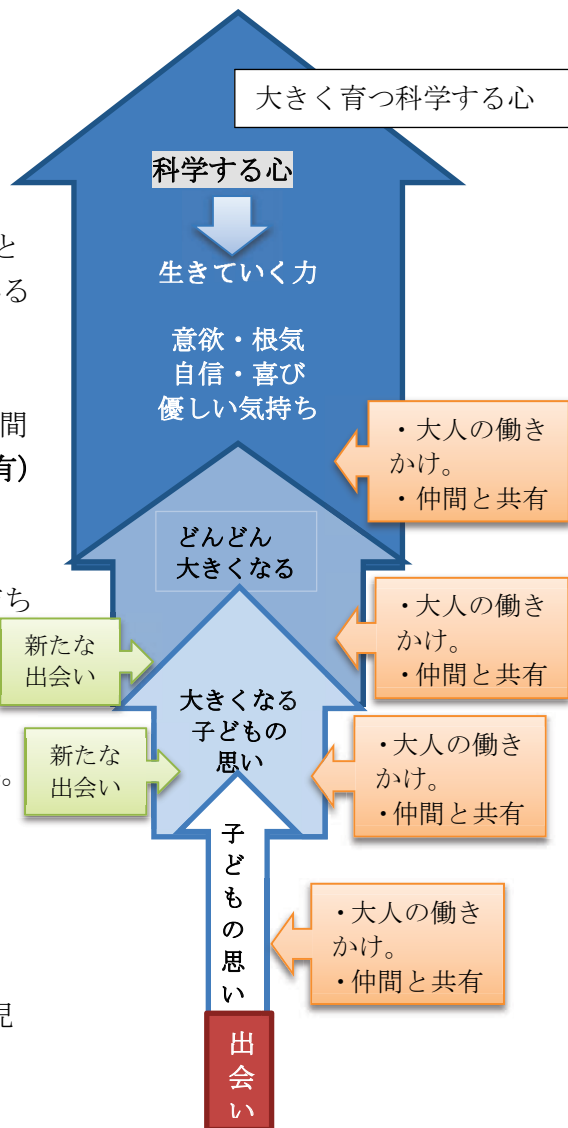
12 月 15 日 園庭の木の枝にピンク色の物が引っかかっていた。(出会い)「何だろう？」(好奇心)手に取ってみる。割れた風船と風船に繋がれた紐に手紙が付いていた。

農薬を使っていない安全で安心な綿を育ててきました。種を撒いて綿の実が出来るまで一生懸命に心を込めて育ててきました。これからも私たちが安全に安心して楽しい学校生活ができるように、また皆さんが安全に安心して暮らせますように願いを込めて綿の種を風船につけて飛ばします。(要略)

【綿の育て方】
.....
兵庫県.....
加西市立宇仁小学校 三年生

風船と手紙





①子どもたちの声に耳を傾ける。行動をよく観察する。
h 「あれ？種、空っぽだよ。」あるはずの種はなかった。(①なんでだろう？好奇心)
a 「落ちたのかなあ。」風船を見つけた木の周りを探してみる。種が見つからない。
d 「何色の種だろう？知りたいなあ。」(①綿の種の色を知りたい。好奇心)

②子どもたちの思いを知る。

m 「カラスが食べたんじゃない？」

y 「途中で落ちたのかも。」

k 「手がかりは、手紙の中に綿の種が入っていて、ジャーって落ちて、そこから芽が出たら分かる。」

保 「なるほどね。確かに芽が出たら落ちた場所が分かるね。どんな葉っぱか分かる？」 (③確認)

k 「それは、分からん。綿って何？ 甘いの？」 (②手がかりがない。綿に対する好奇心)

d 「種がないよ！ て、手紙を書いて、お届けしよう。」

h 「返事を書いて、風船につけて飛ばせばいいんじゃない？ (②同じ事をしてみたい。風任せ。)

y 「凧みたいに紐をグルグルと長くして飛ばす。迷子にならないよ。」

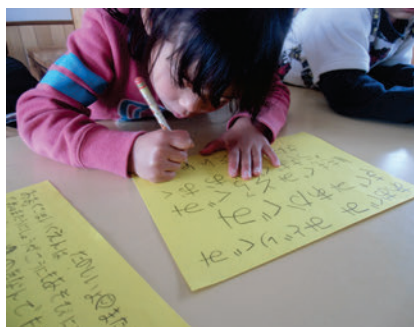
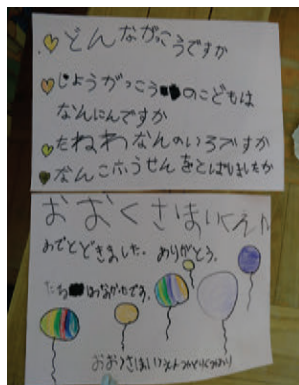
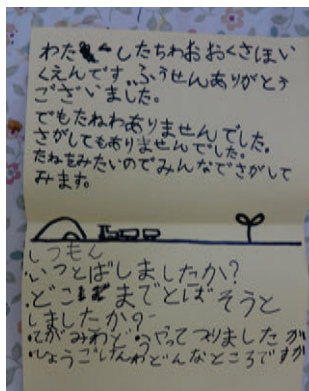
(②風船に手紙をつけて、その風船を凧のように長い紐で操って届けようと考えている。)

s 「紐なんかつけたら飛んでいかんよ。」

a 「兵庫県て何処？ ディズニーランドの近く？」 (②兵庫県が分からない。)

③子どもたちの思いを確認し、スピーディーに行動に移す。

いろいろと話し合い、手紙を書いて郵便で送ることになった。(③希望を叶え、手紙を郵送する。)



考察

割れた風船と出会った。突然のことで興奮していた。あるはずの種は何故ないのだろう？ 何色の種だろう？ 綿ってなに？ 兵庫県は何処？ 宇仁小学校は、どんな小学校だろう？ 風船が運んでくれた好奇心(=ハテナの心)。不思議がいっぱい。知りたいことが沢山あった。子どもたちのワクワクする気持ちが伝わる。この偶然的な出会いから始まる科学する心に付き合ってみることにした。風が運んできた夢のある出会いに感謝した。

② 電話がかかってきた。

手紙を受け取り、うれしかった。是非お話がしたいと宇仁小学校から電話がかかってきた。

①突然の出会い。宇仁小学校三年生。(①新たな出会い)

小 「大草保育園のお友だち、お手紙ありがとうございます。嬉しかったので電話をかけました。」

小 「風船が飛んで行ってどうでしたか？」

S 「不思議だった。」 (②素直な気持ち。好奇心)

a 「うれしかった。」 (②素直な気持ち。)

h 「h聞きたいことがある。どうして風船を飛ばしたのですか？」 (②知りたい。好奇心)

小 「風船の中に入っていた綿の種は、農薬を使っていない、安心安全の種です。綿の種を広げたいので

飛ばしました。」

k 「綿の種はなかったよ。」

m 「なんで種はなかったの？」 (②知りたい。好奇心)

小 「風が強い時に飛ばしたから。落ちたのかも。」

o 「大草保育園に風船がきたのが不思議だった。」 (②なんで？好奇心)

小 「空に飛んで、風でそっちに行ったと思う。」

小 「種を送りますね。5月になったら綿を育ててくれますか？」

k 「綿の種を楽しみにしています。」

小 「・・・綿の種を沢山送りますね。」

そして後日、宇仁小学校から、手紙と綿の種が届いた。



考察

感動的な出会いが実現した。電話であったが園児と見知らぬ小学生とが交流できた。風船が運んでくれた新たな出会い。子どもたちが不思議だと感じていたこと、知りたいと思っていたことも一つ一つ質問して答えを聞くことができた。小学生の答えは、子どもたちの心にストンと落ちる感じであった。こんな理解の仕方もあるのだと知った。風船との出会い。小学生との出会いがもたらした結果だと感じた。

後日届いた手紙の中に写真が入っていた。写真から、三年生は9人しかいないことも判明した。子「少ないね。」驚きで園児たちは目を丸くしていた。色々な種類の綿の種とも出会った。今後の活動が楽しみである。

③ 綿の種。

綿の種が届く。沢山の種類があることに驚いた。



①綿の種と出会う。⑤仲間と共有 意見交換しながら観察。

m 「綿の種、いろんな色だね。」 (①綿の種と出会う②見て分かる)

h 「白いフワフワがある。」 (②見て分かる)

n 「フワフワで気持ちいいね。」 (②触って感じる)

t 「これ緑色。緑めんだって。」 (②見て分かる)

k 「緑くて細いね。」 (②種の形を知る)

y 「和めんは、中の種が綺麗で光ってる。周りのフワフワは白いね。」 (②見て分かる)

n 「和めんはアメリカより小さいね。ちょっと黒いよ。」 (②気づく)

r 「和めんの形は四角いね。」 (②見て知る)

k 「アメリカめんは小さいね。小人さんの綿あめだね。」 (②見て分かる)

n 「茶めんは犬の毛みたいじゃん。」 (②知っている知識で表現)

z 「茶めんは一番でっかい。でっかいのがよかった。」 (②見て分かる)

y 「こうらいめんは、形が米みたいだよ。」 (②知っている知識で表現)

r 「スイカの種にも似ているね。」 (②知っている知識で表現)



考察 “見て・触れて・感じて・発見”

子どもたちは見るだけで分かること、気づくこと、触れたりすることで感じることもある。五感を使い情報を獲得。あっという間に多くを知り、多くを感じたことが分かる。出会いが感動的であったことで、好奇心もより強いことも分かる。大人が予め予定して準備したものではなく、自分たちで見つけて、引き寄せた出会いで（綿の種）あったことが、子どもたちの意欲として表れてくるのだと思った。

④ コットンの日。

①子どもたちの声に耳を傾ける。行動をよく観察する。

「綿の種は5月10日コットンの日に蒔いてね。」と、小学生からの手紙で教えられていた。
y「先生どうしよう。5月10日のコットンの日は日曜日だよ。」

②子どもたちの思いを知る。

保「それは大変。どうしよう？」(③大人は簡単に、5月10日の近辺に蒔けいいだろうと考えるが、子どもたちはどうなのだろう？任せて、必要な援助をすることにする。)

a「お手紙でお知らせをして、どうしたらいいか聞きたい。」(②子どもが出した結論)

③子どもたちの思いを確認し、スピーディーに行動に移す。

子どもたちは早速手紙を書いた。郵便局へ出向き、切手も買って投函した。



②子どもたちの思いを知る。

待っても、待っても返事が来ない。近づくコットンの日。焦り。募る不安。

k「お手紙届いたよね。どうしよう？なんでお返事が来ないのかな？」(②不安が募る。)

s「明日お返事くるかな。」(②期待と希望)

y「お手紙読んでくれているよね。」(②不安)

r「そうだ、電話すればいい。電話でどうしたらいいか聞きたい。」(②新たな方法を考える)

③子どもたちの思いを確認し、スピーディーに行動に移す。

宇仁小学校に電話をする。(③認める)

n「10日(コットンの日)がお休みなんです。どうしたらいいですか？」

先生「良く言えましたね。10日に近い日だったら、どちらでもいいですよ。」

k「そうか。早くても、遅くてもどっちでもいいだよ。」(②気づく)

r「近いだったらいいだよ。」

y「10日に近い方だったら、どっちでもいいってことだね。」(②理解する)



②子どもたちの思いを知る。 11日に植えることになった。

考察

子どもはまっすぐだから、コットンの日を巡り大騒ぎとなった。綿の種を蒔く大切な日が日曜日。どうしよう。大人からみれば、小さな問題も子どもたちにとっては一大事。大人の考えで動かず、子どもたちに任せたことで、子ども主体の活動となり、自分たちで解決できた。納得できた上で種蒔きができることは、この先の活動にもプラスに働くだらうと考えている。分からないことを、素直に遠い知らない人に尋ねられたこと、その経験も生きていく力となるはずである。

⑤ 芽がでた。

●5/11種を蒔く。⑤仲間と共有 一緒に活動。

手紙によると種を1日水に浸けるとあった。コットンの日に一番近い11日に蒔きたい子どもたちは、11日の朝、慌てて種を水に浸け(半日)、午後から種を蒔いた。

●5/18 芽がでた。⑤仲間と共有 一緒に喜びを共感。

子「芽がでたよ。」子どもたちが駆け寄ってくる。(②見て気づく) (⑤共有)

子「ほんとだ。すごいわね。」(②喜びが伝わる) (⑤共有)

s「この黒いの(種の殻)なんだ?不思議。」(②不思議。好奇心)

o「土の中に植えたはずの綿の種が上に上がってきたわ。」(種の殻を被って出てきた。)



④大人の関わり、気持ちを継続させる工夫。

気づいたことが、何時でも、記録できるように、はがき大の紙と色鉛筆を準備して玄関に置く。

子どもたちは早速、芽が出た絵を描いた。

報告もかねて絵手紙にして宇仁小学校に送ることを提案した。

保「みんなが書いた絵を宇仁小学校に送ろうと思います。他にお知らせしたいことはありますか?」

n「芽がでたよ。」(②報告)

a「綿の種をありがとうと言いたい。」(②感謝)

k「綿の種、うれしかったよ。」

r「芽にホカホカのフワフワが上がって付いてきたよ。」(殻のことを報告)

h「ちょっと、面白かった。」(②喜び)

e「なんで、水に浸けてから蒔くの?」(②好奇心)

n「種はなんでフワフワなの?」(②好奇心)



考察

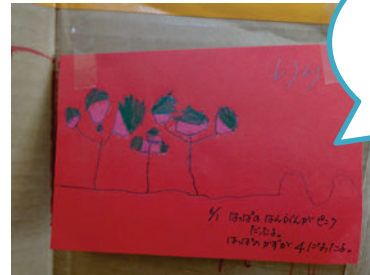
待ちに待った芽が出た。うれしかった。この喜びや発見を園児みんなで共有できるように紙や色鉛筆を準備し、描いた絵を掲示するボードも準備した。誰もが自由に描いて、観ることが出来るように、玄関に置くことにした。長い生長過程の間、子どもたちの好奇心を持続するための工夫である。報告と子どもたちの思いを宇仁小学校の皆さんにも伝えたいと、描いた絵に手紙を添えて送ることも提案した。これもまた、子どもたちの意欲に繋がる工夫である。

子どもたちは、感謝の気持ちを小学校に伝えたい!と言う。偶然の出会いと好意で送られた種。それらを素直にありがとうと言える優しい気持ちがうれしかった。

⑥ 生長を見守る

保育士が水やりをしている。yが寄ってくる。(②意欲)

y「先生は水やりをせんでいいよ。yたちが蒔いた綿だから、yたちが水やりするから大丈夫。」



第1号 絵手紙
6/1 芽が伸びた。
葉っぱの半分が、
ピンクだよ。

大きくなったかなあ?



子どもたちが書いた記録の絵

第2号 絵手紙
6/5「大きくなったよ。」
「インド綿は茎や葉が少し赤いよ。」



7/22 大きくなった。
花が咲いたよ。



あれ？
赤と白の花がある？
不思議だな！



年長児

t 「お花きれい。」
r 「赤と白の花があるね。なんで？」 (②不思議)
a 「同じところの白の隣に赤がある。」 (同じ茎)
h 「グーくらいの大きさだね。」 (握り拳大)
y 「白から、赤になるんじゃない？お花の赤色の中に白があるから、白から赤になると思う。」
・そこで、目印に赤の花には赤のテープ。白の花には白のテープ貼って調べることにする。

↓ 次の日

m 「あれ？白い花が赤に変わっているよ。なんでだろう？面白いね。」 (②発見)



年中児

y 「なんで？なんで白が赤になった？」
n 「夜に魔法使いが来て、赤になあれ！！
って魔法かけたんじゃないかな？」



実を見つける。

「鶉の卵みたいなのができてる。」
「緑で小さいブツブツがある。」
「インド綿はちょっと赤いよ。」
「♪花が咲いて～♪実がなって～♪」歌

7/31

日ごとに実は大きく育っている。

考察

小さな風船が運んだ、大きな好奇心。綿はグングン生長し、花が咲き、実がなった。不思議なことが起こった。白かったはずの花が、次の日に赤く変化していた。「なぜだろう？」不思議で面白い。この好奇心に関しては、それ以上深めることができずにいる。園児には難しく、私たち大人にも良く分からない。今は花の変化を「不思議だなあ！」と感じて、一緒に眺めながら生長を楽しみ、共感を繰り返している。実もどんどん膨らみ、随分と大きくなった。「鶉の卵みたいだったのに、どこまで大きくなるのかな？」と子どもたちは知らないことを知る楽しさに、ドキドキしながら観察している。

綿はこれからがさらに楽しい活動になると予想出来る。大きくなった実がパカンと割れて、フワフワの綿が顔を出す。子どもたちはどんな言葉を発し、どんな反応をするのだろうか。とても楽しみだ。

また、この先の宇仁小学校との関わりも楽しみである。子どもたちは「エコタンバス(町の巡回バス)に乗って、お手紙のお兄さんやお姉さんに会いに行きたい。」と夢を語る。距離感のない子どもらしい考えだ。成長と共に、自分の力でその距離を知る機会があるだろう。その時に理解出来れば十分であると考え今はあえて触れずに見守っている。

ピザ窯 (平成25年6/28～12/26) 年長児
遊び、石のかまどとの出会いから始まる科学する心



★やりたい思いを受け入れることで、意欲的な活動へ繋がった事例

① 石のかまどを作ってみよう。

①遊びの中から石のかまどに出会う。

6/28 幸せの森で、秘密基地作りの遊びが始まった。(木の枝、板切れで)

t 「素敵なお家が出来たじゃんね。次はキッチンがほしいな。」

保 「石でかまどを作る？」 (④大人からの提案。遊びを広げるための声掛け。)

m 「かまどってなに？」 (①好奇心)

保 「石とかを積んで・・・一緒にやろう。」

r 「石持ってくるね。」

t 「tも集めてくる。」

石を積む。大人はUの形にしようと考えていたが、子どもたちの手でOの形になる。

(④そのまま子どもの考えを取り入れる。)



②子どもたちの思いを知る

a 「かっこいい。これで何か焼けるのかな？」 (②期待)

r 「焼いてみたいなあ。」 (②希望・思い)

m 「きゅうり。」 a 「茄子。」 r 「パンとか？」 「竹筒ご飯。」

t 「いいこと考えた。トマト載せてピザを焼きたい。」

k 「チーズも買ってね。」

y 「焼きたいね。絶対に美味しいと思う。」

(②かまどで実際に焼けるのだろうか？何かを焼いて見たい。

ピザを焼いてみたい。大きく広がる子どもたちの思い。)



竹筒ご飯の焼きまねごっこ

考察

よくある遊びの一場面。遊びを広げようと、大人が声を掛けたことで、石のかまど作りへと発展する。大人からの働きかけで、遊びが広がり面白い活動になった。良いタイミングで興味のある提案ができたのではないだろうか。ところが、かまどを作る遊びだけでは終わらず、子どもたちの心には実際に何か焼けるのだろうか？焼いてみたいと思う気持ちが芽生える。科学する心(＝ハテナの心) 好奇心が試したい方向へと向かう。その思いを認め、実現させようと大人も動き始めることにした。

② 何かを焼いてみよう。

③子どもたちの思いをスピーディーに行動に移す。(③思いを認める)

・石を運ぶ 10/9

石を幸せの森から園庭に運ぶ。(④森で火を使うことは火災の危険があるため。配慮)

年少児が運ぶ。(年少児に参加できる機会を作る。)

少y 「ホットドッグの形。」 (②石の形を感じる)

少s 「お餅みたいのだ。」 (②置き換える)

少o 「おせんべいみたい。ぺったんこ。」 (②気づく)



・石を積む。 10/10

r 「どんな形がいいかな？」

森での経験を活かし石を積む。次々に積み進めるが、崩れる。

k 「小さい石も入れる？」 (②隙間に小さい石を詰めることを考える。)

k 「トンカチでトントンすると動かなくなるよ。」 (②工夫する。)

保「さすが。いい考え。」 (③工夫を認める。)

木の棒さきれを見つけ、トントンと石を叩く。



・焼き焼き (焼く調理方法を焼き焼きと呼んでいる。)

10/11 石のかまどで竹筒ご飯を炊いた。

(③子どもたちの思いを実現する。認める)

保「この石のかまど、竹も石も転がらなくていい感じ。」 (③頑張りを認める)

石の凸凹がいい感じで竹を支えている。石の安定感も中々なものだ。

k 「でしょう。k が棒でトントンしたからだよ。」 (②うれしい。自慢)

n 「ピザは？ピザは？ピザ焼くの？」 (②楽しみにしている様子。)

h 「こうゆうの 作らんとね。ピザ出すやつ。」 (②やる気)



10/18 石のかまどでピザを焼く。

(③子どもたちの思いをスピーディーに実現する。認める)

石のかまどでピザを焼く。

石の上に鉄板を置いて、アルミホイルで包んだピザを焼いた。

チーズもとろりと溶けて、美味しく焼けた。

子「美味しい。美味しいね。もう1回食べてもいい？」 (②満たされる)



考察

1つの出会い(石のかまど)から子どもたちの心に次々と、やりたい事やりたい思いが芽生える。その思いを一つ一つ実現していった事例である。

大人が受け入れて思いを形にすることで、子どもたちは認められた、分ってくれた、見ていてくれた、うれしいな、という満たされた気持ちになる。この喜びが次への意欲へと繋がるため、また次のやりたいことの思いが芽生えるのではないかと考えている。子どもたちの声に耳を傾けて思いを形にすることをコツコツと積み重ねる。この積み重ねで自己肯定感=生きていく力が育まれると私たちは信じている。

③ 本物のピザ窯 子どもたちも思いは次のステップへ

同じ日(10/18)の給食時

①本物のピザ窯と出会う。 (①新たな出会い)

m 「ピザはね、大きい薪をパンで割って使うんだよ。」

m 「火の所はブロックで止めて消すんだ。」

m 「m の家のピザ窯は、煙突から煙がモクモクと出るんだよ。」

m 「ピザ窯、お庭にあるんだ。パパが作ったんだよ。見に来ていいよ。」

(①偶然の出会い。m の家にピザ窯があることに気づく)

③スピーディーに行動に移す。

(③子どもたちが今一番関心のあるピザ窯、mの気持ちもくみ見に行くことにする。)

10/28 m宅へ、ピザ窯を見に行く。mが先頭で張り切って歩く。

n「おいしそう。」ピザ窯を見ただけなのに…

r「カッコいい。」「煙突があるんだ。煙突がかっこいい。」(見て気づく)

保「煙突は、作れないかも。」(④ピザ窯は作れないかも。大人の不安を伝えてみる。)

②子どもたちの思いを知る。

r「ピザ焼きたいね。」(②子どもの思い)

保「石のかまどあるじゃん。あれではだめ？」(④大人の思い)

r「美味しいよね。でも、ちょっとしか焼けんよ。」(②待ち時間が長い)

a「石のかまどはキックするとすぐに壊れるし。」(②壊れないやつがいい。)

t「あと、煙突がない。」(②かっこよくない)

直ぐに壊れるかまど。毎回かまど作りから始まる焼き焼きは大変である。

(②壊れない、かっこいいピザ窯が欲しい)

・大人の勉強会

子どもの思いと大人の事情。ピザ窯を子どもたちと園で作ることが可能なのか、作るための目的や問題点も含めて職員間で話し合った。

- ・常設することに問題はないか？
- ・囲われているピザ窯は石のかまどより安全である。
- ・火を使う機会のない現代の子ども、火の扱い方を学ぶ、火育に役立つ。
- ・園で採れたもの、散歩で採ってきたものが焼ける。パンやピザなど作れるものに幅がでる。(食育)
- ・自分たちの思いが形になる喜びや、仲間と協力して一つの物を作り上げる楽しさ。卒園制作のような位置づけにすると、思い出として心に残る。
- ・今までの過程、バケツや石のかまどで積み重ねてきた焼き焼きがより意味あるものになる。
- ・費用はどうするか？

ピザ窯を生徒と作ったという、地域の小学校の先生を招き、作り方の勉強会を行う。

ピザ窯を作ろう！

○園児と一緒に作る方法を模索する。

子どもたちが出来る部分。大人の手が必要な部分などを話し合う。

材料、費用等の検討。

○セメント作りや、煉瓦のカットなど、助けてもらえる方を探す。



バケツでの焼き焼き風景

④ ピザ窯作り

・子どもたちとピザ窯の形を決める。

12/3 耐火煉瓦、ブロック等を購入。


12/5・6 ピザ窯の形を考える。

煉瓦を実際に積木のように積みながら考える。

(④子どもたちが、イメージ出来るように、実際に煉瓦を色々な形に積める環境作りをする。)

k「まるがいい。まるのピザ窯作りたい。」mの家で見たピザ窯はドーム型だった。



h 「四角がいい。だって沢山焼けるもん。」
 「それで、ピザを入れる所はまる  がいい。」

楕円形にする事は、とても難しいことだった。



何度も積み直し
 試行錯誤。
 子「四角(煉瓦)は、
 まるにはなれん。」

・12/24・25・26 ピザ窯作り

①基礎作り



みんなで協力して集めた園庭の小石。



②土台作り
 子「ブロック重い。」
 友達と助け合い。

③水平器の使
 い方を学ぶ。



④セメント作り。



水平になっているかを確認。



⑤固める。
ブロック、煉瓦
水平を確かめ
ながら…



⑥目地を整える。
本物の道具
子「面白いね。」
子「綺麗にできた。」
夢中



⑥できた！！
形は四角。これが精一杯。

色々教えてくれた、
おじいちゃん



考察

秘密基地作りの遊びの中で、石のかまどと出会い、ピザ窯作りへと発展した。当初、このような発展は予想していなかった。石のかまどで焼きたい！という子どもの思いを受け、実現。ピザを焼きたい！という思いを受け実現。子どもたちからの発信だから、一つ一つが意欲的。石のかまどで焼いたピザが嬉しく、面白く、美味しい活動であったことで、壊れない煙突付きのかっこいいピザ窯が欲しくなる。小さな出会いが創大な活動へと変貌した事例である。

大草保育園にピザ窯があること。自分たちで作りに上げたこと。子どもたちにとって、ちょっと自慢。子「保育園にピザ窯があるの、絶対に大草保育園だけだよ。」と、宇仁小学校への手紙にもピザ窯を紹介しているから笑える。ピザ窯の周りには自然と子どもたちが集まり会話がはずむ。これからも子どもたちの思いが詰まったピザ窯を、有効に利用していきたいと思う。

今回、幸運にも助けて下さる地域の方と出会い、実際に作った先生と出会い、話を聞く機会が持てたことで完成にたどり着けた。感謝したい。実に遊びから、ピザ窯完成まで半年かかった。

ぐりとぐらのカステラ (平成 26 年 2 / 13 ~ 15) 年少児
絵本との出会いから始まる科学する心

★絵本からイメージを広げ表現した事例

① 絵本との出会い

① 絵本と出会う。

誕生日会にぐりとぐらのジャンボ絵本を読む。(① 出会い)

保「ぐりとぐらのカステラってどのくらいの大きさかな？」

保「これくらい？」ままごとのフライパンを見せる。

子「全然ちっちゃい。」揃って手を横に振る。

保「じゃあこのくらい？」慌てて、本物のフライパンを見せる。

子「まだまだ全然ちっちゃい。」手を横に振りながら笑っている。

保「こまったな。じゃあこれでどう？」あわてて中華鍋を持ってきて見せる。

子「まだまだ。」

保「どうしよう。もう保育園にフライパンないよ。どのくらい？」(④ 逆に尋ねてみる。)

子「このくらい。自分の頭の上で、手で大きな〇を作る。」

保「そんなでっかいフライパンないよ。」



② 子どもたちの思いを知る。

r 「作ればいい。」「作って焼き焼きすればいい。」(② 子どもの思い)

y 「段ボールで作る。」(② 意欲的)

n 「保育園が燃えちゃうよ。」(② 紙は燃えてしまうこと。)

t 「焼けちゃう。」

s 「ピザ窯で焼けばいい。」(② ピザ窯は直接火が当たらないから)

② カステラ作り



フライパン作り
フライパンは段ボール。アルミホイルで包む配慮を施した。



生地作り

子「園長先生、ぐりとぐらのカステラを作るから、でっかい卵を買って下さい。」

園「でっかい卵、売ってなかったの。ごめんね。でも卵 10 買ったよ。これでどう？」

出来た！

考察

年少らしく、かわいらしい考えが飛び出した。絵本と出会い、イメージを膨らませることで始まった。ぐりとぐらを自分に重ねてカステラの大きさを想像した。だから、とても大きなフライパン。何時も見ていたお兄さんやお姉さんの活動。石のかまど作りでは、石運びに加わった。年少児であっても直ぐに、作ろう！！ピザ窯ならきつと焼ける！と、イメージできた。大人は、段ボールのフライパンで焼くことに、抵抗があった。紙だから…。**失敗覚悟で子どもたちの思いを形にする。**ピザ窯の中で、段ボールのフライパンに火が移りそうになるハプニングがあったが、なんとか少し焦げたカステラが美味しく焼けた。大好きなお話のカステラを作る。段ボールで。子どもの柔軟な発想に教えられた。

何のたまご？（平成 27 年 6 / 11～現在） 年中児

何のたまごだろう？たまごとの出会いから始まる科学する心

★子どもたちが自らの経験を通し、学んでいく事例

① たまごを見つけた。 (6 / 11)

①卵と出会う。

y 「先生。卵見つけた。どうする？温める？」 (①思いがけない出会い。発見にワクワクしている。)

保 「えっ？すごい。何処で見つけたの？」

y に見つけた場所、園庭のサツマイモ畑に案内してもらおう。



②子どもの思いを知る。③スピーディーに行動に移す。

y 「だから、温める？」 (②急いで温めたい。)

保 「温めたいの？」 (③yの思いを確認する。)

y 「絶対に温める。だって、うずらん温めたじゃん。」 (②経験から)

鶉の卵を温めた時に使った、孵卵器を出し、温め始める。(③思いを認める。)

⑤仲間と共有。

y 「何の卵だろう？」 (①好奇心)

s 「へび。」 k 「kもへびだと思う。」

r 「うずらんが出ると思う。」 (②経験から)

s 「ちっちゃかったよ。卵、うずらんより。」 (②鶉の卵と比べる)

t 「うさぎ。」

y 「yもうさぎがいい。」

a 「きつね。」 m 「とり。」 i 「にわとりかな？」



鶉の卵と比べた



考察

卵と出会った。何がでてくるのだろうか？楽しみだ。ワクワクしながら待っている時間が一番楽しかったりする。この時間を大切に過ごしたいと感じた。子どもの思いを認め温め始めたが、大丈夫だろうか？楽しみに孵卵器を覗く子どもたちの姿に、なんの卵かも確認せずに温め、突っ走ってしまったことを後悔した。「産まれてきますように！」大人に出来ることは、祈ることしかなかった。

② たまごが割れていた。 (6/12)

⑤仲間と共有 子どもたちなりに様子を確認しながら原因を考えてみる。

s 「卵割れてる。他に何にもいない。」 (②卵が割れたことに気づく。周りを見ただけで何にもいない。)

m 「何か入ってる。水みたいの。」 (②割れた卵の中に何かを見つける。)

n 「割れた中は、黄色だよ。」

m 「ふつうの卵と一緒に。何で割れた？」 (②不思議で仕方ない。)

y 「割れとる。ああ、もう何も産まれない。」 (②卵を見つけたyは残念でたまらない。)

y 「卵焼きしかできん。うさぎ産まれて欲しかった。」

u 「熱かったんじゃない？」 (②理由を考えてみた。夏の孵卵器は熱い。)

k 「熱かったからじゃない。虫眼鏡でじっくり見てみる。」 (②観察) →

s 「なんでだろう？なんで割れた？もうちょっと割れなかったら良かった。」

n 「なんの卵だったんだろう？へびだったのかな？」 (②知りたい。)

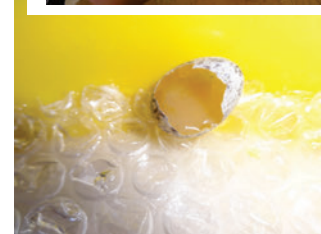
a 「何か入っているかな？と思ってみたけど、何にもいなかった。」

n 「虫とかヒヨコが入っていなかった。」

「熱すぎたんだよ。熱すぎたから、パカンと割れて産まれて逃げた。」 ↗

a 「逃げてないけど、熱すぎてパカンと割れた。」 (②理由を考えてみた。)

「ちょっと冷たい位が出てきたんじゃないかな。」 (②理由を考えてみた。)



考察

楽しみにしていたが、あっけなく失敗に終わった。産まれなかった。子どもたちの思いを受け、温めたが、これで良かったのだろうか？冷静に何の卵なのか、温めて良いものなのか調べることを提案しても良かったのでは…大人の配慮が足りなかったのでは…と悔やまれた。子どもたちは鶉の経験から、卵を温めて孵化させる方法を知っている。これが、子どもたちの知識である。(卵＝温める) 割れてしまった今、何もかもが分からないままに終わってしまった。ただただ残念な気持ちになった。

③ たまごを見つける (7/17)

幸せの森で卵を見つける。

①卵と出会う。

r 「先生、何か卵ある。」 (①4個の卵と出会う。)

s 「恐竜の卵。」クスッと笑う。

r 「やったね。何の卵だろう？」 (①嬉しい。好奇心)

y 「ちょっと柔らかい」 (②触れて感じる。)

m 「むにゅむにゅしとる。」 (②触れて感じる。)

今回の卵は固い殻ではなく、柔らかい殻である。



②子どもの思いを知る。

s 「今度は大事にする。」 (②前回の反省)

y 「大事に育てる。」

n 「そしたら産まれてくる。」 (②期待)

a 「水やりもする。」

k 「あんまり水がかかると死んじゃうから、ちょっとだけ水やりする。」

s 「見つけた所、泥だった。」 k 「葉っぱ入れる。」 (②思いが溢れる。)

③スピーディーに行動。

大人は水槽を準備する。

土・石・葉っぱ
蟬の抜け殻・
落ちていた竹・
せんだんの実
卵を見つけた森を再現

⑤仲間と共有

r 「ちょっとぬれた黒い土。」 卵を見つけた所の土を入れる。

m 「石もあった。」 近くに落ちていた石を数個入れる。

a 「葉っぱとか、蟬の抜け殻とかあった。」 s 「緑の実、見つけたよ。」

幸せの森の中で見つけたものを一緒に入れた。

a 「何か生まれてきて欲しいな。」 (②期待)



考察

幸運なことに、また卵と出会った。今度の卵は殻が柔らかい。子どもたちから、「温めたい！」という言葉は出なかった。「子どもたちは見つけた場所が土だった。」と土を入れ、葉っぱや石、蟬の抜け殻さえも水槽に入れた。卵の近くにあったものをどんどん入れていく。そして、森と同じような環境を作った。理由は話さなかったが、「今回は温めない。」そう考えたことが分かる。失敗がもたらした学びだ。子どもたちが経験を通し、感覚で学んでいく姿を目の当たりにした。

④ 産まれた。(7/22)

①トカゲ？(イモリ?)と出会う。⑤仲間と喜びを共有

s 「大変。割れとる。」

r 「産まれた？何かおる？」子「すごい。」 (①出会い)

n 「かわいい。トカゲなあ！」子「やったあ。」

y 「恐竜の赤ちゃんみたい。小さい恐竜の赤ちゃん。」

m 「何個？おる？1・2・3個。すごい。すごい。すごい。」

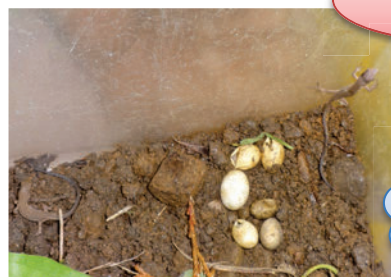
i 「トカゲはスイカ食べるよ。図鑑で見た。」

s 「小さい虫とかミミズ食べるよ。」

a 「お腹がぷくっぷくって膨らむよ。生きてるって感じ。」

s 「割れた卵、ぷにゅぷにゅだね。」 (②触って感じた。)

次の日(7/23)新たにもう1匹産まれ、4匹になった。」



産まれた

釘づけ！



考察

思いがけず感動が舞い込んだ。驚きで子どもたちの目が、丸くなる。そして「産まれた。」が弾む声で保育園中に響いた。本当に驚きであった。「こんなこともあるんだな！」大人も驚きと感動でワクワクした。呼吸と共に、マッチ棒のようなトカゲの赤ちゃんのお腹がぷくっぷくって膨らむ。産まれたばかりの小さな命。子どもたちは釘づけだ。

まさに「かわいい。」がピッタリな言葉。温めて失敗したことが、このような喜びで返ってきた。見つけた所、「幸せの森」に近い環境を自然な形で再現した子どもたち。『卵は温めてはいけないこともある。』経験から大きな学びを得ることができた(自ら育つ力)。子どもたちの自ら考え、学ぶ力は本当に凄い！と、つくづく感じる出来事であった。そして、なにげない出会いにその学びの材料があるのだと改めて分かった。小さな出会いを見逃さないように心がけていきたい。

紙飛行機 (平成 27 年 6 月～現在) 年中児

毎日雨という自然環境との出会いが、科学する心を育んだ

★根気よく遊び続けるなかで、気づきや工夫する力に繋がった事例

① 今日も雨 (①毎日雨という自然環境との出会い。⑤仲間と一緒に楽しむ時間を共有)

今年は7月になっても雨ばかり。連日の雨に室内遊びに飽き、エネルギーを持て余した男の子たちが紙飛行機飛ばしを始めた。

・初めは保育室の中で。

a 「先生。ここまで飛んだ。見とってよ。」

s 「先生、僕はここまで。」 距離を競う。どんどん仲間が増える。

保 「おー。凄い。先生も仲間に入れて。」 子どもたちと一緒に距離を競う。

< 飛ばし方にも変化が >

- 1、力任せに投げる。 床にたたきつけられ余り飛ばない。
- 2、真っ直ぐに投げる。 少し飛ぶが距離が稼げない。
- ↓ 3、力いっぱい上に向かって投げる。 2より長く遠くに飛んだ。

※誰よりも遠くへ飛ばしたい気持ちが、工夫をはじめ。子「真っ直ぐ投げるより、少し膝を曲げて、上に向かって投げた方が良く飛ぶよ。」 気づきへと繋がる。

・次にローカで。

距離を飛ばすことになった子どもたちは、ローカで飛ばすことを考える。

n 「いくよ。せーの。」 距離を競う。保育室より長く障害物が少ないから面白い。

a 「赤組さんの窓、まで行った。」

s 「もうちょっとで緑に行く。」

※距離を保育室の窓などで表現。遠くに飛ぶために力を込める。飛ばし方は膝を曲げて、力いっぱい上に向かって投げるのが主流。

・2階の階段の上から飛ばし始める。

a 「階段で飛ばしてもいい？」 平坦から高さを求め始める。

高さがあるおかげで浮力がうまれ紙飛行機はふわ～と浮くように長い時間飛んだ。距離というよりも飛行時間が稼げた。楽しい。何度も何度も繰り返す。

< 飛ばし方に変化が >

- ↓ 1、力任せから、力を抜いて飛行機を投げる。
- 2、スナップを効かせ上に向かって投げ上げる。

※力いっぱい投げていたが回数を重ねる内に、軽く飛ばすと浮くように飛ぶことに気づく。

2階から途中の踊場までふわ～と飛ぶ。着陸も滑るように。

階段にある壁を越え1階まで浮くように飛ぶ。

2階から踊場のカーブを上手に曲がり (たまたま) 1階まで飛ぶ。

とにかく夢中になって、遊ぶ。 a 「ほんとの飛行機みたいに飛んだ。」



階段



イベント

考察

今年は雨が多かった。6月、7月前半は室内遊びに明け暮れた。そんな中、紙飛行機飛ばしが始まる。何時もなら、暫くすると飽きるのだが、面白いくらい繰り返し遊んだ。雨で外に出られない環境が、継続させた理由の1つであると考え。繰り返す中で、どんどん楽しくなっていく。なぜなら、気づきあ

り工夫ありで飛距離が伸びたり、飛行機の飛び方に変化が見られたりしたからだ。ちょっとした工夫、ちょっとした気づきを試すのに紙飛行機は年中児にちょうど良い素材のようだった。紙飛行機でこれだけ楽しめたのは初めてだった。子どもたちは障害物（室内に張ったタフロープを飛び越える。）を超える遊びも考え出した。面白いから、他の学年にも教えたい。招待するイベントを企画。**子どものアイデアは子どもの心に響く。**大いに盛り上がり、どの学年も良い笑顔で楽しんだ。どんな環境であっても、柔軟に遊びを楽しむ力が子どもには備わっている。この力も自ら育つ力であると気づかされた。

VI まとめ

今回は、出会いに注目した。子どもたちは、なにげない毎日の生活の中で、様々な事象と出会っている。（＝好奇心）小さな出会いも、大きな出会いも子どもたちにとっては同じように重要である。不思議なこと、ドキドキすること、夢中になれることと出会い、経験を通して“見て・触れて・感じて” どんどん吸収し心を豊かにしている。子どもの吸収する力は、本当に優れており子どもならではの育つ力ではないかと思う。このような姿からも、子どもたちにとって出会う様々な事象は、とても大きな意味があることに気づく。

また、保育園での活動は、集団だから仲間と共有できる。始まりは一人でも、周りを巻き込みながら、一人一人の意欲を助長していく。仲間と同じ時間を共有し、一緒に笑い、一緒に喜び、一緒に考え、一緒に悲しむ。みんなと一緒にだから、面白く、諦めずに頑張れる。また、保育士も仲間の一人として、同じ時間を共有し共感していきたい。側にいる大人が応援してくれる安心感。その空間で子どもたちは、自分の思いをどんどん大きく膨らませながら楽しみ、自らの育つ力を育むのではないだろうか。

子どもたちの育つ力を、最大限伸ばすためにも、子どもたちの声に耳を傾け、行動を観察し、その思いを感じる。子どもたちが出会う好奇心を見逃さないこと。そして活動は子ども主体であることを大切にしたい。そうすることで、考える力や豊かな感性、創造性を育む科学する心が育つと考えている。

VII 課題と今後の方向性

大草保育園は、住宅街にある保育園が故に抱える問題がないわけではない。したがって子どもを主体とした保育を実践していくためには、地域の理解と協力が得られるための努力を惜しむことなくやることも必要となる。大草保育園でやっていることをわかり易く伝えることで、理解と協力が得られることにつながると考える。そのためにもこうした研究を継続して行うことが大切であるようだ。

公立保育園であるため異動や退職で職員が変わる。人的環境が変化することは、物的環境の変化と同様、子どもにとって大きな影響がある。こうした変化や新たな出会いによって、子どもの発達を促しより良い方向に導くためには、保育目標である『見て・触れて・感じて・発見』ということについて、子どもたちの一人一人のつぶやきを聞くように、保育士一人一人の思いを出し合い、同じ価値観を持って保育していくことが大切である。こうした努力に終わりが無いが“継続は力なり”の言葉を信じて努力していきたい。

<参考>

加西市立 宇仁小学校

兵庫県加西市にある市内で一番小さな小学校

三年生 9人

全校生徒 65人 (2015 1月現在)

(宇仁小学校からの手紙より)

◀ 前回の報告 ▶

『卵は命なんだよ』 “命を感じ、大切に思う気持ちを育む たまごプロジェクト”

鶉ちゃんたちの世話を中心にやってきた年長児の卒園が近づく。そこで、うずらんちゃんの今後について子どもたちと話し合った。

保「先生とみんなで相談したいことがあります。みんなは3月に卒園したら小学校に行くでしょう。今、鶉ちゃん6羽いるよね。うずらんちゃんたちのお世話をどうしたらいいかな？」

②子どもたちの思いを知る。

a 「小学校に持って行く。」

u 「ずっと育てたいから、持って行きたい。」

r 「かわいいから。」

s 「赤・黄（年中児）に育ててもらおう。」

k 「桃・空（年少児）もいる。」

m 「学校に持って行きたい。」

保「学校で誰が育てるの？」

y 「私たちが世話をする。絶対にする。」

保「違う保育園の子たちはどうだろう？」

子「教えてあげる。」

e 「だめだめ。学校の先生がだめ！っていう。」

保「そうだよね。学校の先生がだめ！っていうかも。」

e 「それから、園長先生もだめ！っていう。」

保「そうだよね。s君が赤・黄さんをお願いをするって言ってたけど、赤・黄さんはどうだろう？」

a 「ん〜。」（困ってる。） y 「悲しい。」

m 「寂しいと思う。」

a 「じゃあ、6羽いるから、半分こ。3羽3羽にすればいい。」



③子どもの思いを確認

保「なるほど。3羽が学校で、3羽が保育園ということだね。」

a 「違う学校に行く子も見れる。」

保「そうだね。違う学校に行く子も保育園に来れば見れるもんね。」

h 「いいね。いいね。」

まずは、園長先生に『学校に持って行っていいのか。』学校には『貰ってもらえるのか。』年中さんには『お世話をお願いできるのか。』聞くことになった。

③スピーディーに行動に移す。1/20 学校にお願いに行く。

先生「こんにちは。今日はなんだったかな？」

子「うずらんちゃんを学校で飼ってもいいですか？」

m 「お願いします。」 子「お願いします。」

t 「めんどろ見て下さい。」

先生「みんなも学校に上がってきたら、お世話をお願いしますね。」



子「はい」揃って手を挙げる。「やったあ。」バンザイして飛び上がって喜ぶ。早速、学校に送りお出す準備。

- ・学校の皆に世話の仕方を知らせるために、世話の方法の絵を描く。
- ・世話の仕方の劇の練習など。

2/19 鶺の入学式（幸田町立幸田小学校にて）

鶺ちゃん
の入学式



鶺の入学式後

・学校に入学した鶺ちゃんたちに会うために、小学校に散歩に出掛ける園児たち。学校で元気に育っている姿を笑顔で眺める。

小学生より

- ・鶺ちゃんの名前が決まりました。「バニラ・チョコ・シナモンです。」と報告があった。
- ・年長 y 「お姉ちゃんが（卒園児）学校のうずらんの卵を持って帰ってきたんだよ。じゃんけんに勝ったんだ。ゆで卵にして食べたよ。半分こして2人で食べたんだ。甘かったなあ。」学校の鶺ちゃんたちも順調に卵を産んでいる様子が伝わる。



考察

ありがたいことに、子どもたちの思いがまた1つ叶えられた。

何度も失敗を繰り返し、産まれてくることの出来なかった命に涙を流してきた子どもたち。小学校に行っても「何時までも一緒にいたい。」「成長を見ていたい。」「会えなくなることが寂しい。」育ててきた鶺たちを大切に思う子どもたちの気持ちがひしひしと伝わる。

また、私たち保育士も“たまごプロジェクト”を通し、子どもたちの心の中に命の大切さが芽生えてきているのを肌で感じ、このまま終わることなく卒園した後も、鶺を介して命の大切さをさらに育てたいと願っていた。それだけに鶺たちが小学校に入学できたことを嬉しく思った。小学校のご厚意に感謝したい。

園に残った、3羽の鶺たち。うずちゃんたらんちゃん、花子ちゃん（花子ちゃんは、産まれて直ぐに目の病気になり、片方の目が見えません）は大草保育園で今も元気に過ごしている。年長児を中心に全園児が何らかの形で関わりを持っている。「うずらんちゃんは家族。」大草保育園の大切な一員となっている。

園長 春日井 奈緒子 研究代表 森田 華奈恵
年長担任 竹本 恵美・大須賀 恵利子 年中担任 尾崎 伽奈・川和田 結華

